The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	PLEASE please me! : Please に関する一考察
Author(s)	春木, 茂宏
Citation	Osaka Literary Review. 1999, 38, p. 161-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

PLEASE please me!: Pleaseに関する一考察

春　木　茂　宏

1．はじめに

小論では、pleaseの語用論的、社会言語学的分布を捉えることを目的とする。[1] 特に、pleaseが「話し手にとって望ましい世界として発話を解釈せよ」という手続き的意味（procedural meaning）を持つと記述することよりそれらの分布に対して妥当な説明が可能であることを示す。

2．言語事実

この節ではpleaseに関する語用論的、社会言語学的分布の例を観察する。まずは語用論的分布の例から見てみよう。語用論的な立場から考えると、pleaseは直接的に依頼を伝達する発話とは共起が可能である。[2]

(1) a. Can you open the window, please?
　　b. #Are you able to open the window, please?
　　c. Will you carry this for me, please?
　　d. #Are you going to carry this for me, please?

(1a)と(1c)は間接発話行為であるが直接的に依頼を伝達するのでpleaseと共起可能であるが、(1b)と(1d)は直接的には依頼を意味しないので共起不可能である。[3]

また、(1)の例と非常に似た振る舞いであるが、hintやそれに近いものとは共起不可能であるという事実が観察される。

(2) a. #It's cold in here, please.
　　b. #Must you make that noise, please?

c. Could you not make that noise, please? (Green (1975: 135))

(2a) は requestive hint と呼ばれるものであり、間接的に依頼を意図しているために、please との共起は不可能である。(2b) も修辞疑問文として間接的に依頼を意図するが、(2c) とは異なり直接的な依頼ではないために please とは共起しない。

文中に現れる please の位置によって適格性が異なる場合がある。Gordon and Lakoff (1975: 98) では発話が会話の含意として依頼を伝達する場合には文頭の please と共起可能であると指摘している。

(3) a. *It's cold in here, please.
b. Please, it's cold in here.

同じ行為指示的発話行為 (directives) でも、(4a) に見られるように依頼と please は共起可能であるが、(4b-e) のように指示、勧め、申し出、許可などとは共起不可能である。[4]

(4) a. Will you please wait in here?
b. *Please take 3 pills after each meal.
c. *Why don't you please go with him?
d. *Shall I please make tea for you?
e. *You may please go home now.

(影山・Hofmann (1986: 372))

これらの分布の違いに対し、影山・Hofmann (1986) では、please には話者利益的な用法があるために、聴者利益となる忠告・指示・勧め・申し出・許可などは不適格になるという説明を与えている。おそらくこのような分析の方向性は正しいと考えられる。

さて、次に社会言語学的な制約を見てみる。次の (5-9) の例はポライトネスに関わるものである。まず、please が文末に現れる場合には、話者が何らかの権限を持っている状況であり、そうでない状況はポライトネスとして不適切な発話になる。

(5) a. [From a police officer to a man behaving suspiciously]
Can I see your I.D., please?
b. [A teacher to a student]
Close the door, please.
c. [A student to a teacher]
*Close the door, please.　(影山・Hofmann (1986: 372))

(5a-b)は権限の持っている者がそうでない者に対する発話であるので、pleaseが現れることができるが、(5c)は生徒から先生の発話であるので、pleaseが生じると失礼な響きが出てくる。

次に、他人から提案されたときに、その返事としてpleaseを付けるのはポライトネスとして配慮のある表現である。

(6) a. [In a hotel bar]
What would you like to drink?
I'll have a martini, please.
b. [At a party]
Would you like another glass of wine?
Yes, please.　(Hilton (1986: 58))

また、pleaseは依頼の内容が軽いものと共起しても問題ないが、重いものと共起する場合には失礼になる。

(7) a. Could you lend me ¥500, please? (OK)
b. ?Could you lend me ¥5000, please?
(Depends on the hearer's financial condition)
c. *Could you lend me ¥25000, please? (Impolite)
(Hilton (1986: 58))

したがって、聞き手が遂行することが当然の依頼内容の場合はpleaseは共起しても問題ないが、そうでない場合は失礼になる。

(8) [From a businessman to his secretary]
a. Could you type these two letters, please?
b. Could you finish a little later this evening, please?

(9) [From a businessman to another businessman, especially one from a different company]
a. 'Could you tell me how much you think our new product should sell for, please? (Sounds pushy)
b. 'Have you got the figures for Financial Year 1985, please? (Impolite)
c. Have you got the figures for Financial Year 1985? (OK)
(Hilton (1986: 59))

以上、pleaseに関する4つの語用論的振る舞いと4つの社会言語学的振る舞いを見てきた。もう一度8つ全ての振る舞いをまとめておく。

(i) 直接的に依頼を伝達しているかどうかによってpleaseとの共起の適格性が異なる。伝達していれば共起可能である。

(ii) Hintやそれに近いものとは共起不可能である。

(iii) 文中に現れるpleaseの位置によって適格性が異なる。文頭に生じる場合は容認度があがる。

(iv) 依頼とは共起可能であるが、指示、勧め、申し出、許可などとは共起不可能である。

(v) Pleaseが文末に現れる場合、話者が何らかの権限を持っている状況である。そうでなければ失礼な表現になる。

(vi) 提案の返事としてpleaseを付けるのは丁寧度が高くなる。

(vii) Pleaseと共起する場合依頼内容の軽重により丁寧度が異なる。

(viii) 聞き手にとっても当然の依頼内容ならばpleaseの共起は自然で配慮のあるものになるが、そうでなければ失礼になる。

次節以降ではこれらの振る舞いを説明したいと思う。

3. 可能な分析

一般的にpleaseの意味の記述には3種類の方法があると考えらえる。第一は発語内的力を示す働き (force indicating devise, force disambiguator)

に関わるもので、ここではリクエストマーカー説と呼ぶ分析方法をである。第二はポライトネスに関わるものであり、ポライトネスマーカー説と呼ぶことにする。第三はそれ以外の分析方法であり、please がなにか特定の意味を語彙化していると考える立場である。小論は第三の立場であるが、まず先にリクエストマーカー説とポライトネスマーカー説の問題点を指摘しておく。

まず、リクエストマーカー説の立場から考えるならば、「please は依頼を伝達しようと意図しているマーカーである」と考えることになる。こう考えると、少なくとも問題点の (i)、(ii)、(iv) は解決できるであろう。なぜなら、発話の内容が直接的に依頼を意味しているものとは共起可能であるということは問題ないし、そうでない hint や他の発語内的効力とは共起不可能であるということが説明できる。しかし、問題点 (iii) が示すように、please が生じる位置によって適格性が異なってくるという問題に対する説明は不明であるし、さらに残りのポライトネスに関わる問題点 (v－viii) に対してはなんら説明を与えることはできない。例えば、(7c) の例で依頼内容の軽重による丁寧度の違いは単なるリクエストマーカーとしての働きだけでは説明がつかないものである。このように、発語内的効力を示す機能としての分析はポライトネスに関わる問題点を扱えない。

(7) c. 'Could you lend me ¥25000, please? (Impolite)

次に、ポライトネスマーカー説の問題点を指摘しよう。基本的にこの分析ではリクエストマーカー説とは反対のことがいえる。すなわち、please が丁寧であるというだけでは、どうして please が間接的依頼、hint、また、依頼以外の発語内的効力とも共起不可能であるのかという発語内的効力に関わる問題に対して何の説明も与えられない。しかし、それだけでなく、例えば、(7c) のような依頼内容の負担度が重い場合には please を付ける方が丁寧でなくなるというポライトネスに関わる問題もポライトネスマーカーとしての働きとは全く反対の結果を示している。このように、please が単なる

ポライトネスを示すマーカーであるという分析は深刻な欠陥を明らかにしてしまう。

以上の足早な問題点の指摘からもわかるように、please の分布に関する問題点には、第三のアプローチが必要である。小論ではこの第三の分析をとるが筆者の提案は次節にゆずり、この節の最後として、第三の分析の立場に立つ Geukens (1978) の研究とその問題点を示しておく。Geukens は、please は条件文の語彙化であると分析し、次の (10) は (12) のような内部構造を持ち、(11) のようにパラフレーズ出来ると主張する。

(10) Would you (please) remove your hat(, please)?
(11) Would you remove your hat, if you don't mind (removing it)?
, if you like (removing it)?
, if it pleases you (to remove it)?
, if you please?
(12) I ask you [whether you will remove your hat if you have no objections against doing so]. (Geukens (1978: 268))

確かにこの分析によると、先にあげた語用論的問題点のほとんどは説明できる。しかし、依頼以外の指示、勧め、申し出、許可などとは共起しないという問題点 (iv) はその限りではない。Please が条件文の語彙化であるならば、以下の (4e') のパラフレーズを許すと考えられ、(4e) の適格性を誤って予測することになってしまう。

(4) e. *You may please go home now.
e'. You may go home now, if you please.

さらに、Geukens の分析ではポライトネスに関わる問題のほとんどが説明されないことになる。上のパラフレーズが示すように、please は「聞き手が特定の行為を好んでするならば」という条件的意味の語彙化を示している。そう考えると、please の条件的意味から「話し手は聞き手の意志を尊重している」という意味が含意され、本質的に please はポライトネスを示すこ

とになる。しかし、そうすると、please がつく (5c)、(7c)、(9b) がどうして失礼になり、(9b) から please を除いた (9c) は失礼でなくなるのか－問題点の (v)、(vii)、(viii) －が説明できなくなる。

(5) c. ʳClose the door, please. [A student to a teacher]
(7) c. ʳCould you lend me ¥25000, please? (Impolite)
(9) b. ʳHave you got the figures for Financial Year 1985, please? (Impolite)
c. Have you got the figures for Financial Year 1985? (OK)

Please をリクエストマーカーやポライトネスマーカーとしては捉えない第三の立場はおそらく正しい方向である。なぜなら、自然言語の please は発語内的効力とポライトネスの両方に関わっているからである。それゆえ、please の意味を記述するには両者の特性を考慮に入れる必要がある。しかしながら、Geukens の研究は発話行為論の全盛時のものであるために、発話行為的分析に偏っており、したがって、ポライトネスに関わる please の特性を捉え切れていないと考えられる。

以上の考察でわかるように、please の振る舞いを捉えるためには発話行為とポライトネスに関わる二つの側面を十分考慮して please の意味の記述を行わなければならない。そこで、次節では、二つの側面を反省的に考慮して別の分析を提案したい。

4．代案：「望ましさ」と手続き的意味論的分析

Please の意味を考える場合に最も重要になってくるのは、please には概念的な意味があるのかないのか、すなわち、please という語を聞いた場合に、それが意味するような特定の概念的実在物が意識されるのかどうかという問題である。本分析では please には概念的な意味がないと考える。というのも、please を聞いても非常に抽象的な「依頼」や「丁寧さ」という概念は思い浮かんでこないからである。では、どういった意味を please は持って

いるのだろうか。このことを考える場合、実は先で問題点を指摘したリクエストマーカー説の考え方が有益な視点を与えてくれる。リクエストマーカー説の立場からpleaseの意味を乱暴に記述すると、「pleaseを含む発話が依頼を伝達していると解釈しなさい」という意味になる。すなわち、pleaseの意味には大半の語彙にみられるような概念的意味がなく、発話解釈における指示を表す意味があるということを示している。この考察は非常に重要で、本分析も部分的にこの立場と類似している。ここでは、pleaseが関連性理論で主張されている手続き的意味（procedural meaning）を持っていると主張する。以上のような観点に立って次のようにpleaseを記述してみたい。

(13) Procedural meaning of PLEASE
Interpret utterance (related to it) as a representation in a world desirable to a speaker.

(13) は発話解釈の推論における指示と話し手の心的態度が記号化されていることを意味する。すなわち、「pleaseに関わる発話の内容は話し手にとって望ましい。そしてそのように解釈せよ。」という手続き的意味を持つということである。このように想定すると2節であげた振る舞いに対して適切な説明が与えられる。

まず、そもそもどうしてpleaseと依頼が共起可能かということを考える。本質的に依頼とは聞き手が行為を遂行することを話し手が望んでいるという発話行為である。さらに、その行為は聞き手や第三者ではなく、話し手本人にとってのみ望ましいというものである。そうでなければ、発話行為としては申し出や提案や助言などになってしまう。[5] したがって、依頼と (13) のpleaseの意味は適合する。このように考えると、語用論的振る舞いが解決できる。まず、依頼以外の発話行為とは共起しないという問題点 (iv) は簡単に解決できる。すなわち、望ましさが話し手に向かうかどうかによって、依頼とは共起するが、指示、勧め、申し出、許可とは共起しないことが説明

できる。後者は全て聞き手にとって望ましい行為となるからである。つぎに、含意としては依頼を伝達しても、直接的に依頼を伝達しないような発話とは共起できないという問題点（i）と(ii) は次のように考えられる。

(1) a. Can you open the window, please?
　　b. *Are you able to open the window, please?
(2) a. *It's cold in here, please.

この場合のポイントになるのが、please 以外の発話要素（命題部と呼ぶ）で意図されている解釈が話し手にとって望ましい世界の表示かどうかということである。Please と共起する (1a) では、法助動詞 can の意味特性（潜在性）により、命題部は現実世界を記述していないことが示され、命題部が実現されていない話し手にとって望ましい世界の表示であると解釈できる。したがって、please と共起できる。一方、(1b) では表意として「聞き手にそのような能力があるかどうか」を直接的に尋ねており話し手にとって望ましい世界の表示であるかどうか不明である。それゆえ、「話し手にとって望ましい世界」を表示する please とは共起できない。(2) の場合も同様で、please 以外の命題部は現実世界の描写であるので、please の意味とは不整合を起こし共起できない。

さて、おそらく、本分析での一番不明瞭な点が語用論的問題点 (iii) に関するものであろう。すなわち、どうして please が生じる位置によって容認度が変わるのかという問題である。

(3) a. *It's cold in here, please.
　　b. Please, it's cold in here.

この問題は言語伝達にとって不可避である線形性に関わる時間的処理方法と please の手続き的意味との相互作用に関係すると考える。(3) の命題部 [it is cold in here] それ自体は現実世界の描写でありそれ以上でもそれ以下でもない。(3a) の場合は命題部が please の前に生じているために、「この場

所は寒い」という現実世界の言明という解釈が最も自然に導ける。したがって、先行する現実世界の言明という解釈と後続する「話し手にとって望ましい世界」という pleaseの意味とは不整合を起こすために共起不可能であると考えられる。[6] 一方、(3b) は文頭に pleaseが生じるために、後続の命題部が話し手にとって望ましい世界に関わるものとして解釈せよという手続き的意味をまず始めに伝達する。したがって、後続の命題部が話し手にとって望ましい世界を実現するための条件であるという解釈が行われて間接的に依頼を伝達しているという解釈が可能になり容認度が高くなると考えられる。

ここまで語用論的分布に対する説明を見てきたが、つづいて社会言語学的振る舞いを分析してみる。ここで重要になるのが pleaseの語用論的機能である。(13) で示した手続き的意味を持つ pleaseが現実に使用されると次のような機能を持つ。すなわち、「話し手にとって望ましい」という意味を明示することにより、「聞き手の未来の行為に対する拘束力の強化」と「依頼を実現してくれた場合の聞き手の寛容さの明示」の二つを含意として伝達する。この二つの語用論的機能によって社会言語学的振る舞いを適切に捉えることが出来る。

まず、問題点 (v)、(vii)、(viii) は二つの語用論的機能によって、統一的に説明できる。

(5) b. [A teacher to a student]
Close the door, please.
c. [A student to a teacher]
ʳClose the door, please.

(5) は話し手の権限の有無と pleaseの共起に関わる問題である。権限のある者から権限のない者への依頼である (5b) では、pleaseの付加は丁寧な表現になる。これは、「依頼を実現してくれた場合の聞き手の寛容さの明示」という pleaseの語用論的機能のためである。権限のある者（話し手）が権限のない者（聞き手）の寛容さを認めるということは聞き手（生徒）に対す

る配慮を伝達するからである。また、(5b) では「拘束力の強化」という語用論的機能は問題にはならないであろう。というのも、その前提として権限のない者が権限のある者の依頼を遂行するのは当然のことであるという一般的知識が存在するためである。一方、(5c) では、「拘束力の強化」という語用論的機能が一層強調され、聞き手（先生）の未来の行為に対する拘束力が高まる。そのために権限のない者（生徒）が権限のある者（先生）の未来の行為を拘束することを強く伝達してしまうために、かえって無礼さを伝達することになってしまう。

もう二つの問題点も同様である。

(7) c. *Could you lend me ¥25000, please? (Impolite)
(9) b. *Have you got the figures for Financial Year 1985, please? (Impolite)
c. Have you got the figures for Financial Year 1985? (OK)

(7) においても、please はその語用論的機能により拘束力を強化する。その場合、発話が依頼であるということをより一層明確にされ、聞き手に対する配慮よりも依頼を遂行する強制力の方が強調されてしまうことになる。このために、依頼内容が重い場合 please が付加されると丁寧度が低くなるという問題点 (vii) の振る舞いは当然の結果となる。また (9) の例が示す問題点 (viii) は、聞き手にとっても当然の依頼内容ならば please の共起は配慮のあるものになるがそうでなければ失礼になる、というものであった。これも please が伝達する語用論的機能を考えれば自然な振る舞いである。依頼者である話し手は please を加えることによって、聞き手にとっても当然である依頼内容が話し手にとってのみ望ましいということを伝達し、依頼を遂行してくれる「聞き手の寛容さ」を含意することが出来る。それゆえ丁寧さを伝達できる。しかし、依頼内容が聞き手にとって当然でない場合、please を加えることでかえって「拘束力の強化」を伝達してしまい、押し付けがましくなり失礼になってしまう。最後に、類似した分析が問題点 (vi) に対し

ても可能である。[7]

(6) b. [At a party]
Would you like another glass of wine?
Yes, please.

(6) にあるように提案の返事として please を付けると丁寧度が高くなる理由は次のように説明できる。相手が持ちかけてきた提案に承認という形で応答するのは通常は何の問題もない。丁寧さということから考えても丁寧でも無礼でもない中立的なものである。しかし、その場合に please を加えると、その内容は話し手にとって望ましいことであるという please の意味を伝達し、「聞き手の寛容さ」と同時に、聞き手（提案者）の提案が話し手にとって負担になっていないという配慮を含意することが出来る。それゆえ、提案の返事として please を付けることが丁寧度を高めることになる。ここでも、please の手続き的意味によって含意される「聞き手への配慮」という語用論的機能が重要な役割を果たしているのがわかる。

5．おわりに

以上、please に関わる語用論的、社会言語学的分布に関わる８つの問題点を中心に分析を行った。それらの問題点に適切な説明を与えるには、please の意味を語用論的振る舞いと社会言語学的振る舞いの両方を考慮に入れる必要があることを示した。そして小論では、please には「話し手にとって望ましい世界の表示として発話を解釈せよ」という手続き的意味があると想定することで、先の問題点全てに自然な説明を与えることが出来たと考えている。

しかし、please に関わる現象はこれだけではない。例えば、同一依頼発話における文頭、文中、文末による意味の違いなど、まだ今後に解決すべき問題点は山積していると言える。本分析の方向性は正しいと考えられるが、未だその途上であることは「どうか」ご容赦願いたい。

注

1　本稿で使う「語用論的」とは専ら発語内的効力（illocutionary force）に関わることを意味し、「社会言語学的」とは待遇度（politeness）に関わることを意味する。

2　本稿では＃は語用論的に不適格な場合を、？は不自然な程度を、p は丁寧であることを、r は失礼であることを表す。

3　ただし、Green（1975）は（1b）と（1d）が質問という発話行為を意図する場合には please と共起可能であると述べている。この場合は情報提供の依頼としての質問というよりも、応答という行為そのもの依頼であると考えられる。なぜなら、このことは単なる質問と please との共起は不可能であることを考えると明らかである。例えば、"#Could John please be attractive to your sister?" は不適格な発話である。したがって、please が行為や情報提供に関わらず依頼とは共起するという見方は誤りである。

4　厳密に言うと、please は依頼とだけ共起するわけではない。嘆願（plea）も please と共起する（Green（1975: 122）を参照）。しかし、このことは本分析にとって問題とはならない。

5　小論では「話し手にとってのみ望ましい世界」を言語化しているのが依頼であると考えている。このことについてはここではこれ以上触れずに、稿を改めたいと思う。

6　このことを間接的に支持する考察がある。Please の前にいくらかのポーズを置くと適格になる場合がある。この場合命題部に基づく解釈が促進され依頼という含意を導くことに成功するだけの時間的猶予がある。それゆえ依頼が本質的に持つ「話し手にとって望ましい」という特性と please の意味が一致することになる。

7　ここで伝達される語用論的機能は先に挙げたものとは異なるが、please の手続き的意味から語用論的機能が含意されるという点では同じである。

主要参考文献

Blakemore, Diane (1987) *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell, Oxford.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.

Cole, Peter and Morgan Jerry L. (eds.) (1975) *Syntax and Semantics 3: Speech Act*, Academic Press, New York.

Dancy, Jonathan, J. M. E. Moravcsik and C. C. W. Taylor (1988) *Human Agency: Language, Duty and Value*, Stanford University Press, Stanford, California.

Geukens, Steven K. J. (1978) "The Distinction between Direct and Indirect Speech Acts: Towards a Surface Approach," *Journal of Pragmatics*, 2, 261-276.

Goldschmidt, Myra M. (1998) "Do Me a Favor: A Descriptive Analysis of Favor Asking Sequences in American English," *Journal of Pragmatics*, 29, 129-153.

Gordon, David and George Lakoff (1975) "Conversational Postulates," in Cole and Morgan, 83-106.

Green, Georgia M. (1975) "How to Get People to Do with Words: The Whimperative Question," in Cole and Morgan, 107-141.

Hilton, Tom (1986) "Please... Be Careful!" 『時事英語研究』1986年11月号, 58-59.

井出祥子他 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動－大学生の場合－』南雲堂 東京.

影山太郎・ Th. R. Hofmann (1986) "Please, Please, Plea-eese," 『英語青年』1986年11月号, 8.

Matsumoto, Yoshiko (1989) "Politeness and Conversational Universals: Observations from Japanese," *Multilingua* 8-2／3, 207-221.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Searle, John R. (1975) "Indirect Speech Acts," in Cole and Morgan, 59-82.

Wierzbicka, Anna (1985) "Different Cultures, Different Languages, Different Speech Acts," *Journal of Pragmatics*, 9, 145-178.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1988) "Mood and the Analysis of Non-declarative Sentences," in Dancy et al, 77-101.

Wilson, Deirdre (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.